

小川正子の晩景：
近代日本のハンセン病隔離政策と臨床医

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学日本史学会 公開日: 2019-07-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松岡, 弘之 メールアドレス: 所属: 尼崎市立地域研究史料館
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20190709-003

Title	小川正子の晩景：近代日本のハンセン病隔離政策と臨床医
Author	松岡, 弘之
Citation	市大日本史. 21 巻, p.54-73.
Issue Date	2018-05
ISSN	1348-4508
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学日本史学会
Description	2017 年大会報告

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

小川正子の晩景——近代日本のハンセン病隔離政策と臨床医——

松岡弘之

はじめに

国立療養所長島愛生園の女医である小川正子（一九〇二—一九四三）が一九三八年に発表した『小島の春』は、小川がハンセン病の「啓発」と患者の検診と収容のため各地を訪ね歩くさまを和歌を織り交ぜながら描いた手記である。病いとそれへの偏見に怯えながら暮らす患者とその家族たちは、突如姿を現し療養所への入院を勧める女医に驚き、逡巡するが、小川の信念と誠意はついに患者やその家族の心を動かし、入所を決意させる。そして、小川は「病友よ、その純真な、しかし私達に向けて流す感傷の涙を拭いて、貴女は今その愛する故郷の為に、共に悩む病者に呼びかけねばならないのだ、悩む病者よ来れと——愛する故郷の人達よ、土佐の癪者を救え」^①などと、ハンセン病患者や、地域に向かって、隔離の推進を叫ぶのだった。

こうした女医の熱い訴えは、刊行後大きな反響を呼ぶ。初版五〇〇部にすぎなかった『小島の春』は、たちまち版を重ねて三〇万部を超

えるベストセラーとなり、一九四〇年に映画化されると同年の『キネマ旬報』グランプリ第一位を獲得した。そして、例えば「『小島の春』を読み感激した一青年職工」は、近所にもハンセン病患者がおり、誰もが「その家の前を通る時には呼吸を止めて駈歩して」通っていると、早期の収容を願う一方、自らは徴兵検査に必ず甲種合格し「国防の第一線へ身命を捨て、先生に負けずに働きます」と寄附のための為替を愛生園に届けたのである。^②

だが、ハンセン病療養所の厳しい現実が一九九〇年代以降、本格的に明らかにされるなかで、小川の評価は反転した。これまで患者に対する小川の「献身」が高く評価されてきたことに対し、荒井英子、藤野豊、成田龍一らは、小川やその作品について、いわば「絶対」隔離政策の尖兵として患者を療養所に追いやった極めてデマゴギッシュな性格を持つものであったと評価する。^③こうした動向に反発した末利光が、らい予防法廃止後に小川を郷土である春日居町（現・山梨県笛吹市）の「偉人」として再顕彰しようとしたことは、人権侵害を正当化するか

のごとく受け取られ、厳しく批判されたのであった。^④これらに対して、小川が作品中で患者に向かって呼びかけた「病友」という語の指示する範囲が、隔離政策と同調しながら拡大していくことを指摘した荒井裕樹や、小川が隔離の推進に寄与したとしても歴史的な制約によるものとした秦重雄などの冷静な文学研究も現れるようになった。^⑤現在では『小島の春』が隔離強化の流れに棹さすものであったことは広く受け入れられ、作品そのものの評価はほぼ固まっているといえる。

本稿では作品ではなく、小川自身がその作品と行く末をどのように捉えていたかという視点から、改めて小川正子という女医の果たした歴史的役割について検討を試みるものである。史料として用いるのは、小川が『小島の春』を献じた相手でもある愛生園長の光田健輔にあてた書簡である。小川は一九三七年六月に発病した結核療養に専念するため、『小島の春』刊行の前に長島を離れていたが、後にふれるように光田からは激励や復職を求める来信がしばしばあり、また小川も自らを取り巻くさまざまな問題について光田への手紙を認めていた。だが、それらの多くは、作品が大きな反響を呼ぶなかで、自らの孤独や苦悩を光田に告白するものとなっている。師と仰いだ光田だからこそ、自らの内心が伝えられたものと見てよい。なお、付け加えておくべきことは、小川正子が病床で綴っていた日誌が存在することである。これらは、末利光が館長を務めた笛吹市春日居郷土館・小川正子記念館が所蔵し、展示しているものの、小川に対する批判的検討が進むなかで、現段階では研究利用が認められていない。その点では本

稿の分析も不十分なものとならざるを得ないが、小川が自らの役割を果たそうとするなかで、果てない葛藤を抱え込むこととなっていたことは知られてよい。そして、このことは隔離政策が強められていく医療現場で、小川のような臨床医たちがどのような矛盾や葛藤を抱えたのかを浮かび上がらせることとなろう。本稿は、そのひとつの試みである。

以下、まずハンセン病医学を目指した小川が『小島の春』を世に送り出す過程を見た上で、ついで『小島の春』刊行され光田にあてた一九三八年十月から四一年四月にかけての書簡にうかがわれる小川の心境をたどる。そして、最後に小川が一九四一年十月に長島愛生園を退職した後、一九四三年四月に死去するまでの様子について、それぞれ検討する。

1 臨床の現場へ

(1) ハンセン病との出会い

あらかじめ行論に関わる範囲で小川の履歴を略述しておく。^⑥

一九〇二年三月、小川正子は山梨県東山梨郡春日居村（現・笛吹市）で製糸業を営み県会議員を務めていた父の清貴と母のくにとの間に生まれた。県立甲府高等女学校を卒業した後の一九二〇年、遠縁で戦後、衆議院議長も務めることになる法制官僚の樋貝詮三と結婚したものの、三年後には協議離婚した。樋貝との離婚は小川にとって大きな痛手となったようで、長姉は妹の正子の身を案じて新宿区柏木の自宅

に呼び寄せた。その夫は小川が「柏木のおじちゃん」と慕い、医師を目指すきっかけを与えた開業医の石原重茂である。彼は、内村鑑三の弟子である塚本虎二から無教会主義を学んだ人物でもあった。^⑦

石原の影響を受けるかたちで小川は医学の道を志すようになり、一九二四年に東京女子医学専門学校に入学した。そして、一九二八年十月、授業の一環として初めてハンセン病療養所である第一区全生病院を訪問したのであった。この見学が強いインパクトを与え、小川はハンセン病患者のために尽くすことを決意する。当時、東京女子医専には、付近の市ヶ谷教会の金井為一郎牧師の説教を聞く会であるF M会があった。校長の吉岡弥生は、学生である潮崎（田中）逸野が、安倍千太郎とともにハンセン病患者への伝道に傾倒していったことなどから、^⑧学生が宗教に接近することには批判的であったというものの、小川の東京女子医専の同期生であり、のちに愛生園でも同僚となった大西富美子によれば、F M会への東京女子医専からの学生の参加は少なくなく、卒業までの五年間のうちに全校生徒の約一〇％が洗礼を受けていたともいう。^⑨もともと小川自身は受洗しておらず、自らを「グレスチャン」^⑩とも評していたともいうが、こうした小川特有のけれどもある表現のなかに、母も信仰していたキリスト教への親近感が表明されているともいえる。石原や東京女子医専の友人達を介したキリスト教への接近は、小川の医師として患者に奉仕する心構えをかたちづくっており、その過程でハンセン病と出会ったことが小川にとって決定的な意味をもったのである。

卒業を間近に控えた一九二九年、小川は再び全生病院に光田を訪ねて医師としての就職を希望したものの、欠員がないとして採用は断られた。医専を卒業し東京市立大久保病院に勤務するようになった小川は、翌年になって再び光田を訪ねたものの、やはり同じ理由で断られ、奉育会病院に移った。この奉育会病院が一九三一年に閉鎖されると、小川は和泉橋慈恵病院に移り、さらに同年、東京市王子区十条に小児科医院を開業した。この間、小川の母は、娘のハンセン病療養所への就職には一貫して強く反対し、開業を勧めていたのである。母に従った小川は開業して妹たちと同居し、女性として自立した人生を歩もうとしているかに見えた。だが、それは本人にとって「自分一人の生活を充たすにすぎない」意味のない日々を過ぎず、再び「癪院への志望が制えがたいものになって来たとき、私はある医学雑誌で岡山県の長島に建設中だった療養所が完成したことを見た」^⑪のであった。その療養所こそ、光田が必要性を強く訴え、完成した初の国立療養所である長島愛生園であった。

（２）愛生園へ

こうして小川は翻意を求める妹を振り切って長島へと出発し、正式な辞令が発令されないまま、愛生園での医療活動に加わるようになった。ついに光田からも医務嘱託として勤務することを認められ、一九三四年には正式に医官に就任した。突然の訪問に愛生園の医局スタッフは呆れ、小川に「海から来た娘」という渾名を与えたという。そのエピソードとともに島に降り立った際のことを小川は次のように

記す。

「えらい元気ですね。」光田先生はさう短に云って、またしばらくして、「淋しいところですよ。」

としみ／＼云はれました。しかし、私は、こゝへ来た喜びでいっぱいでした。しかしこの救われることの何一つない世界、くずれゆく肉体をどうするすべもなく生きている人々の怪異な姿と、診察室の膿の臭いのむんむんする中であって、私は本当に涙をこぼしながら、文明国といわれながらこれは何ということだろうと嘆きました。¹²⁾

念願かなって療養所での診療を開始した小川の気持ちの高ぶりをよく伝えるもので、重い症状に苦しみつつある患者と、それを放置し続けた「文明国」とが対照的に描かれ、女医の献身ぶりを読む者に強く印象づける。目の前で苦しむ患者を救うという使命感が、小川の行動の原点にあったといえよう。ちなみに、小川が執筆した医学論文は、光田との共著『INTERNATIONAL JOURNAL OF LEPROSY 誌（国際らい学会誌）に発表した』“A study of one hundred and fifty autopsies on cases of leprosy”（「ハンセン病一五〇の解剖事例についての考察」）という一編に過ぎない。だが、そのことは必ずしも小川の医師としての力量の不足を意味するものではない。戦後、愛生園に勤務した医師の原田禹雄によれば、小川は正確にカルテを記述していたとい¹³⁾う。小川は医学論文という

かたちではなく、日々の臨床のなかで力を発揮したのであった。

一方、療養所の拡張が実現し、多くの患者が集められるようになるなかで、療養所はハンセン病の学術研究と臨床の双方の面において役割を強めていた。癩学会が設立されたのは小川が全生病院を訪問する前年の一九二七年のことであって、療養所の医師たちにとって専門医集団や学問としての一領域の形成は、これまで研究・臨床を牽引してきた大学医学部への対抗心ともなっていた。少し後のことになるが、一九四三年八月、愛生園を訪問し医師としての採用を志願した前田（神谷）美恵子に向かって、光田は大学が嫌いだと述べ、「私はいつも〇先生にこういう。あなたがたは自分で何もしないでにおいて、他人のしたことを少しずつ集めて、まとめて発表する。それで何がわかりますかって。何でも自分でやってごらんなきいってね。ああ遊離してやっていちゃ、レブラのことなんか何もわかっていやしないですよ」と続けた。¹⁴⁾光田のいう〇先生とは、前田もあこがれた東京帝国大学医学部教授の太田正雄のことであろう。太田が自らは治療法の開発を目指しつつ、啓発と外来診療の重要性を説いて日本の隔離政策を批判していたこともあって、光田は隔離の効果を損ねるかのような大学病院への警戒心を隠そうとせず、両者の溝は深まろうとしていたのである。¹⁵⁾

こうした動向の中で、念願叶って愛生園でハンセン病患者の診察にあたるようになった小川は、一九三三年、九州方面での患者収容を皮切りに、西日本各地での検診・収容活動にも従事するようになる。その経過を記録するよう光田が指示したことがきっかけとなり、小川は

文章を綴り始めた。こうして「土佐の秋」（一九三四年九月）、「再び土佐へ」（一九三六年一月）、「小島の春（その二）」（同年四月）、「小島の春（その二）」・「国境の雲」（同年七月）、「阿波講演旅行の歌」（同年十一月）、「淋しき父母」（一九三七年六月）などが書き上げられたころ、光田や同僚の医師である内田守が出版を頻りに奨めるようになったのである。「何の奇もない報告書に過ぎぬものをと幾度か躊躇したがとうとう御厚意をいなみ難く、すべてをお任せすることになった⁽¹⁶⁾」というのが、刊行経過について小川の述べたところである。小川本人は結核を発病し、一九三七年六月から長島での闘病に専念しており、すでに検診もその記録を残すことも困難な状態にあった。そして、療養に専念するため三八年十月からは郷里の山梨県に帰省することになるのである。こうして小川のはる稿は、内田に託され『小島の春』という題が与えられて、長崎出版から私家版として五〇〇部が刊行されることになった。

出版直前の十一月五日、小川は編集にあたった内田の労に感謝しつつも、本の寄贈先は思い当たため著者への送付も不要と述べる⁽¹⁷⁾。ここからは自らの著作が刊行されることについての喜びなどは感じられない。しかし、そうした小川の心境をよそに、『小島の春』は大変な反響を呼ぶことになったのである。

2 病床の小川正子

小川の著書は凄まじい反響を呼び、版を重ねた。そして、自ら結核

を患ったことでハンセン病患者への奉仕を心ならずも断念した著者はいわば「悲劇のヒロイン」として受けとめられることとなった。小川正子が師である光田健輔にあてた書簡は、こうしたなかで綴られたものである。以下、三つの観点から検討する。

（1）逃れられない「虚像」

一九三八年末頃書かれた書簡⁽¹⁸⁾は、愛生園医局の同僚が皆学位を取得したことを喜ぶ。それは愛生園が「全国療養所で一番質の良い病院医局」となったことを意味したからであった。そして、その優れたスタッフの活躍に期待をよせながらも、「私などねてゐて考へて居りますと、七年も居て何にも患者さんにしてやらなかつたとおもひます」と自らの非力を嘆いてみせる。光田はそのような小川の心情を慮ってか医学書を贈っていたのだが、いまだ園から持ち帰った行李を解くことさえできていない小川は「こんなに御配慮を頂いて一体私になが出来ますのでせう、私はあらゆることに望みも自信も失つてしまひました」と無力感に苛まれていたのである。

小川はこの書簡を女性雑誌への連載が決定したことを光田に伝えるために認めていた。刊行間もない著者への原稿依頼も『小島の春』の反響を物語るものだが、このことも小川にとって喜ぶべきものではなかった。『新女苑』という雑誌の記者が東京から来訪して居座り続けるのだが、小川からしてみれば「何分にも先方はセンセーショナルにかき度いのですから、私のきもちなどわかり様等もなく、どの様なことになりますやら、一夜ねむれずにすごしました」と、つい取材に応

じてしまった自らを悔いる。そして、とうとう再三の断りにもかかわらず、翌年二月号からの連載を承諾させられてしまうのであった。だが、連載を引き受けたとしても、小川は「小島の春を土台に文壇にうつて出る野心はありません」と、自らが文筆業に転ずることを考えていない。なぜならば、「あれ〔『小島の春』、引用者注〕は記録なればこそ出来たので、私はやつぱり一枚の原稿をかくよりか患者さんの脉をみるべき現場の現業員であるべきであつたし、そうあり度いのです」と述べ、診療にあたつた日々を思いを馳せるのであった。そのような自らの経験を綴ってきたという小川の自負からすれば、療養所を離れた自らの言葉は「みんなぬけがら」であつて、「癩の広告にするために私はそれを不純なきもちでかくべきでせうか、そんなことがすらく」と出来る人間であつたらこんなになるしんでは居りませんでせう」と苦しい胸の内を吐露するのであった。

療養に専念するために長島を離れたにもかかわらず、小川のもとには多くの執筆依頼が押し寄せており、そして「私も毎日／＼手紙を出すのに疲れて一体何のためにうちへまでかへつて来たのかわからなくなりまして、私にはもう逃げるところが御座いません」というほどに、小川は追い詰められていたのである。

加えて宛名を書き記した用紙の脇には「然し患者のことをおもふのは、つまりは私の己惚れとぐちなのです、患者さんには患者さんの世界があります」という言葉さえ書き付けられている。小川が患者との距離を表明することの根底には、自らがハンセン病患者の世界にとも

にありたかつたにもかかわらず、そこに到達し得なかつたという自責の念ばかりでなく、そもそも職員はハンセン病患者の世界を共有することはできないという諦観、さらには自らが結核という不治の病いとなることで初めてハンセン病患者の世界を垣間見たことへのおののきが横たわつていたといえよう。

だが、こうした告白を行う一方で、小川は「癩の広告」という役割を担い続けていたことも事実である。やむなく引き受けた『新女苑』の連載でも、自身の来歴や思い出深い患者を書き連ねながら、それぞれに対して懸命に尽くしてきたことを振り返っている。例えば、一九三六年八月に愛生園入所者が光田らの解任と自治を要求した長島事件が勃発したことで、小川は「私の誠実のたりないことがどんなにかなげかれ、心貧しく無力なことが、再びたてないほど私のすべてを打ちくじました」と深い挫折を味わう。そして、「騒ぎのとき、もつとも狂暴であつた患者の一人」がその後深い信仰を獲得し、末期の際で「すべての人に静かに詫び、親しい友人：の手を握つてしずかにさよならと言つて」息を引き取つたことを以下のように振り返る。

摺古木のような手と手は、握っているのではなく、ふれあつて
いるだけのもので、他からみるとそれは汚いだけのものでした
でしょう。しかし、私はそのときほど、人の心の美しいことをみた
ことはありませんでした。その兇暴であつた人も、結局はいい人
であつたのだ、と思つてみると、光田先生は、涙をぬぐいながら

しずかにおっしゃるのでした。「すべての人は善良です。乱暴であつた者ほどこんなに早く、こんなにも判ってくれるのですよ」私はききながら不覚にも涙をおとしてしまいました。しかし、それは決して悲しいことばかりではないのです。私たちは、やはりここにいて、あの人たちと共に生きていけるのだと言うことを信じふるいたつことのできた喜びの涙だったのです。⁽¹⁹⁾

そして、小川は「どんなことをされやうと、ちつとあの人たちの心を偲んで、私たちは許すのだ。そして、もつとく身と心のすべてをかたむけて、患者の方のよりよき友にならねばならん」と誓つたことを披露する。こうしたエピソードはたしかに小川の主観としては偽りのないことであつたといえようが、読む者に光田や小川の患者への献身ぶりを鮮明に印象づけ、ともすれば患者を埒外にいやするような「癪の広告」となっていることは否定しがたい。既に検討したように、小川の奔走もあつて療養所は超満員となり、患者の待遇は低下していた。だが、小川が『新女苑』で展開した叙述は、患者と医師の情緒的な結び付きのなかで園を美化するものであつて、読む者にとって、長島事件という入所者決起の根底に単なる物質的欠乏にとどまらない療養所運営への入所者の関わりという重要な論点が存在したことなど思いもよらぬこととならう。

なお、長島事件について、小川は一九四〇年八月九日付の光田健輔宛の書簡で、「もう五年目です、患者さん達ばかりがわかつたので

はないのですから、何卒患者さん達のことをかんべんして下さいませ様に、世の中のこと、すぎてしまへば何もかもゆめの様です」⁽²⁰⁾とも記している。『新女苑』の記事が光田と入所者との和解を感動的に叙述しながらも、実際のところ光田自身は患者への不信を拭い去ろうとはしていなかったのである。小川の控えめな忠告は、事件当時、小川を含む職員一同が光田解任要求を拒否し首謀者の徹底的な取締を主張していたことからすれば、当時の療養所運営の非を認めた点において、その後の小川なりの内省を示唆するものとなっている。

さて、数多の来訪者のなかで、小川に強い印象を与えたのが、大阪朝日新聞社の記者である杉村武であつた。杉村は同新聞のコラム「天声人語」の執筆者として知られる杉村楚人冠の息子であり、一九四四年九月には『週刊朝日』編集長を務めた人物である。一九四〇年二月上旬になって杉村は小川のもとへ「あなたが患者の境遇を心もちをありのまゝにかいた様に、私もあなたをありのまゝのあなたをかいてみたい」⁽²¹⁾という手紙を寄越した。小川は「天使だとも大事業だとも偉丈夫だとも、些しもおだて、居ない文面が甲州黒駒の姐御の氣に」いったため、取材に応じることとした。既に多くの虚像に辟易していた小川にとって、杉村の言葉は「私はやはり自分の生い立ちの様にありのまゝ、に父の子としての素朴さをもつて、病むにしろ働らくにしろ、この後の人生は処し度い」という清々しい前向きな感情を抱かせるものであつたからである。小川の前に現れた杉村は、『小島の春』を丹念に読めば、一般の読者が感激で読み流してしまうような端々に、小川

が愛生園や救癲事業に不満を持っているということが分かると指摘したという。そして、小川とさまざまな話をするうちに「あなたも仲々の長島育ちの小狸」とも言われたのだと知らせる。だが、対談を終えた小川は光田に対して「記者としては上々だ」と杉村の批評眼に舌を巻きながらも、胸中をよぎる不安について釈明せざるをえなかったのであった。小川自身は、杉村が「相当に観察をし終へた小川正子をかき出すことだろうとおもひますが、私はまつたくそれでよろしいので、その人がかうと感じてかき出す小川がどんなものでありませうとも動揺することは私自身なからうとおもひます」と、自らへの評価については腹をくくっている。ただし、そこで展開されるであろう小川像が「愛生園の御迷惑になる様なことは絶対にないとおもひます」とか、「もしも万一に世間的问题が occurs 場合がありますが、私ははつきりと自分の責任を負ふつもりで居ります」などと強調したことは、杉村が指摘した実際のハンセン病政策を小川が批判したかのようにとられる危険性を、光田にだけはあらかじめ釈明しておこうとするものであった。責任を負うと強がりながらも、小川にとつて虚像をはぎ取られることもまた、恐るべきものとなりつつあったのである⁽²²⁾。

一方、一九四〇年七月十日付の光田宛書簡では、より直接的にハンセン病を取り巻く状況への批判が述べられている⁽²³⁾。きっかけとなったのは、七月二日に東京神田共立講堂で日本MTLが開催した「小島の春の夕」という催しであった。その内容は、著者である小川に知らされることはなく、踊りさえ加えて「際物扱ひ」されたことに小川は腹

を立て、『小島の春』の著作権管理を委ねていた出版者の長崎次郎に對して抗議した。だが、ハンセン病に関する多くの書籍を世に送り出していたはずの長崎は、自らは著作権者でないため企画に口出しできなかったと取り合わなかったという。長崎の態度は、小川からすれば言い逃れにほかならず、「山の中に引込んでゐても何もかも長崎さんがしてゐながら、失敗したりうつかりしたりした時だけ著作権は私には何にも関係ないから――云々⁽²⁴⁾」といはれば私たつても著作権⁽²⁵⁾の確立といふことを考へないわけには行きません」と憤慨した。

また、同じ書簡では厚生省も槍玉に挙げられていた。詳しい経緯は不明だが、小川にラジオ出演が持ちかけられ、最終的には実現しなかったという。この経過について報告を受けた「(厚生省の、引用者注)床次課長さんがRadio放送を小川にさせて病が悪化でもしたら責任ものだったのに断つてくれてよかった」と述べたということが、小川の耳に入った。小川には中央官僚の振る舞いが責任回避を行動原則とするかのようにうつり、「ビジネスで仕事をするのは淋しいことです」とこぼす。それは、自らが情熱を注ぎ続けてきたハンセン病への取り組みが、損得勘定だけで判断されることに耐えられなかったためであろう。とはいえ、「かといつて事務でなしに何処に仕事があるといふのでせう」「そういう風に考へて行かなければ日本のいまの機構の中で官吏といふものはつとまらないものだといふことはよくわかつてゐます」と言葉をつなぐことで、官僚の立場にも一定程度理解を示しており、彼らへの苦言も光田への私信に閉じ込められたにすぎな

い。以上のように、小川を擁護するかのように振る舞う社会事業家も官僚も、小川からすれば事業を進めるうえで不可欠な、ハンセン病問題への誠意と熱意を欠いているかのように思われたのであった。

また、小川の出身地では女医を顕彰する目的で幼少時の逸話さえ創作されつつあった。まだ幼い小川が家の前の栗の木に登ったという話について、自らが木登りはできないこと、栗の木は小川が小さな頃にはまだ小さな木に過ぎなかったことなどを述べ、「生きてゐてさへのばれもしない私が、生へても居なかつた栗の樹にのぼるのですから、私の死んだら一体どんな伝説が出来るか驚くばかりだろうと思ひます、おもしろいといへばおもしろい様なものの、つまらない人生だなと感じすには居られません、そして真実のほんとうの真実のものは喜びも歎きも埋められて嘘許りが伝はるのでせう⁽²⁴⁾」と、自らの神話化を醒めて見ていた。

以上のように、ジャーナリズムや社会事業家、官僚、故郷などに対して不信と不満を抱えながらも、小川は次第に自らの「虚像」から逃れることができなくなっていた。だが、その一端は、期待される文章を書き続けた小川自らがつくりだしたものにほかならなかった。

(2) 「癩文学」をめぐって

小川が『小島の春』を刊行する前後、療養所入所者による短歌や俳句、小説などの文学作品が「癩文学」として脚光を浴びつつあった。こうした入所者の創作発表の場となったのが療養所の発行する逐次刊行物であり、職員たちも文芸活動を支援していた。『小島の春』を編集し

た愛生園の医師である内田守も患者に文学の手ほどきを行った一人であり、馬場純二はそれが入所者と社会の「人格的握手」を果たしたいという内田の意図によるものであると評価している。⁽²⁵⁾内田は、愛生園赴任前の第五区九州療養所在職時にも、島田尺草をはじめとする多くの患者作品を世に送り出していた。こうした後押しのおかげで、入所者は短歌・俳句・散文などさまざまな形式で創作に励んだのであった。

いわば療養所という触媒によって産み落とされたこれらの作品は、ハンセン病患者の境遇や実存的要求を表現したものととして、文壇に強い衝撃を与えていた。一九三六年に『いのちの初夜』を発表し、この年の文学界賞を受賞した第一区全生病院入所者の北条民雄は癩文学の代表的な作家として評価されている。だが、荒井裕樹によれば、北条は川端康成に指導を受ける際には患者としてへりくだった態度を見せる一方、園内では自らの作品が他の患者と同水準のものとして扱われることを拒否する屈折したものであった。⁽²⁶⁾北条は日記のなかで、癩を扱えば、あるいは癩者が書けば癩文学というものではないと、癩文学をめぐる動向を批判しつつも、自らは療養所以外の主題を作品化できないまま亡くなったのであった。⁽²⁷⁾

さて、こうした癩文学の動向をめぐる動向には、病床の小川正子も大きな関心を寄せていた。一九三九年九月三日に小川が光田健輔にあてた書簡は、新刊のために小川に歌の提供を求めた内田守を批判し、光田にとりなしを依頼したものである。内田がこのとき出版を計画していたのは、愛生園の女性入所者によって結成された「萩の花」会の

歌集であった。これは内田守人編『萩の島里』として婦女界社から刊行されたが、内田はこの本のために小川の歌二〇首を転載することを求めたのであった。小川は「正直に申して萩の花の歌といふものはけつしてレベルに達してゐるものではなく、ただこの癩文学のなみにのつかつて女性のうたで涙をとろうとするだけのもの、婦女界社としても決してすぐれたものを世に問ふといふよりは「あてこもう」といふだけのこと⁽²⁸⁾」と刊行に潜む商業主義的な思惑を厳しく批判し、自らは療養中で萩の花会の活動に関わっていないことから、歌の提供は断りたいと光田に伝えている。一方、歌の提供を求めた内田に対しては、「文壇関係の人達か癩文学の洪水に対して何といつてゐるか内田さんは御存知ないでせうか」「内田さんの特性はジャーナリストにあるので、決して万葉辺りに沈潜する文学的の趣味を持たれてゐるひとだとは考へられません」などと、入所者の作品を次々に送り出す手法や資質に疑問を投げかけていた。内田が自らの出版事業をハンセン病問題の「啓発」としての役割を期待していたとしても、それがジャーナリズムの中で感傷的な素材としてしか取りあげられないことの問題性を、小川は身をもって経験していたのであり、入所者の作品がそうしたかたちで消費されることに耐えられなかったのである。

ただし、小川は入所者の作品をすべて批判していたわけではない。先にあげた北条民雄、そして長島愛生園の歌人であった明石海人（一九〇一—一九三九）への評価は極めて高い。同じ書簡では「北条・明石と大きい石を投げて切角正しい意味で立ち上つた癩問題がつまらない

ジャーナリズムにあつかはれてしまふことは、決して癩のためによいことではないとおもひます」「白描以後の癩文学のみちは多難です」とも述べる。明石海人についての評伝的研究を行った山下多恵子によれば、明石が没する直前に友に支えられながら刊行した『白描』は、病いによって失明し、気管切開によって声さえ失うなかで、「自らに鋭く問うた生存の理由を証したもの⁽²⁹⁾」であり、ハンセン病文学のなかでもとりわけ高く評価されることとなった。小川がいうところの北条・明石が立ち上げたハンセン病問題の「正しい意味」の中味について、小川自身の説明はないが、ここには幾重にも疎外された患者の実存的要求をいかに受けとめるかが含まれると見てよからう。『小島の春』のあとに『白描』が出たことについては、「最高峰が最後に出たからともよかつた」と喜ぶ反面、今後のハンセン病文学の前進を「多難」とも予想するのである。隔離の推進や、そのもとで入園者の抗議さえ発生している療養所運営の実情からすれば、ハンセン病患者の人間的要求をどう受けとめるかということが、医師に対しても突きつけられていたが、やはりここでも小川自身の言及はない。

一方、小川が明石にあてた一九三九年四月十三日付の書簡が残る⁽³⁰⁾。明石の『白描』献本に対して礼を述べた小川は、明石のことを野田という本名で呼びかけ、「白描のお祝ひの歌会なんかも島にはあることでせう。野田さんのお部屋でうたの会があったのなんか、ついせんだつてのこの様におもつてゐますのに、あなたは目白舎を、私は島を出るほどに変わったことが出来てしまひましたね」と、かつての交流を追

想し、互いの境遇の変化をつづる筆致にはやや感傷的なものがあつた。また、自らの『小島の春』も「問題があるとかの話なので遠慮していた」と明石には届けていなかった。いずれも両者の間に、心理的な距離があることを示唆するものとなっている。明石はこの手紙を受け取った二ヶ月ほど後に亡くなり、小川の直観した新しい癩文学の「多難」は、その旗手として期待していた明石の不在によっても強められたのであつた。

(3) 映画『小島の春』の上映

一九四〇年『小島の春』は東宝によって映画化された。四月には監督である豊田四郎が愛生園を訪れ、映画で小川役を務めた夏川静江も、診察方法を学ぶため小川のもとを訪ねた。七月末に封切られた映画は内務省・文部省・厚生省が推薦して大ヒットとなり、この年の「キネマ旬報」第一位を獲得したのであつた。光田はハンセン病が映画の素材となることと自分が夢のようであると映画の画期性を強調したうえで、「癩事業の宣伝映画としても、数百数千回の講演会を催すよりも有効であろう」と、賛辞を惜しまなかった。⁽³¹⁾ 映画における患者の不在という映像的特徴は藤井仁子が指摘し、シナリオの分析については石居人也が、またその反響について荒井英子がそれぞれ分析している。⁽³²⁾ 以下では、映画についての小川自身の周辺の反応を検討しておきたい。

小川は光田に対し、一九四〇年七月二十七日付の書簡で映画に言及している。⁽³³⁾ 映画を内務省などが推薦したことを新聞で知ったと述べた上で、「まづ映画は私には直接関係はないのですから、これらのこと

はすべて映画自体に帰すべきことで、私がバカヅラを出すには及ばないだろうとおもひます。まづ、充分によく出来て原著者も光栄だといふところです。それだけです」と記す。『小島の春』が刊行されたときと同じく、つとめて抑制的な反応を心掛けているように見える。

一方、結核を発病して蓼科で療養を始めていた長島愛生園分館長の宮川量は、公開の前月に東宝からの試写招待を断ったとし、坂入美智子は小川が甲府で母と映画を見た際、「私だけが献身的な人間のように描かれ、癩院に働く方々の献身と仕事の面が描かれていない」とだけ漏らしていたと記している。⁽³⁶⁾ これまで作品の一人歩きを作者としてやるせなく見守ってきた小川からすれば、映画を独立した作品として尊重するかたちで、自ら積極的な関わりを避けようとしていたことが、こうした近しい人々の証言からはうかがえる。だが、光田宛の書簡には、「〔日本〕農業新聞とかいふのに私の映画化についての感想が出てゐますが、これは〔長崎〕次郎どのがかいたのです」とあり、小川の感想が長崎次郎によって勝手に発表されたものと主張している。小川はそのことについてもはや反発するようなことはしなかったが、映画との距離を保とうしつつも、自らの名が騙られることで社会一般に流布する小川のイメージはさらに歪められたのであつた。

とはいえ、光田に対しては「世の中といふものは妙なものの、私がしゃべりくだびれたら本が出て、本がしゃべりくだびれたら映画になつてくれて、まづまづこれで事業としての癩宣伝の効果といひますか、役には立つこと、おもひます、ただ原作者が大変立派な人間だと

いふ点は大変困るのです」と述べている。時間とともに主張の手段は変化したものの、小川は隔離の推進が必要という立場にひきつづき身を置いていたことに変わりはない。また、映画も小川にのみ焦点があたりたることを懸念しつつも、光田の意向にそった反応を見ていたといえよう。したがって、「長島の人達にも一日もはやくみせてもらひ度いと長崎さんにもいってあります」とあるように、愛生園での上映会開催にも期待を示していたのであった。

一方で、映画が製作中であった一九四〇年四月、小川は「続『小島の春』」を発表した。⁽³⁷⁾ここで紹介されたのは、乱暴者として職員から怖れられた重度の神経痛を患う松原という患者である。松原は、治療が気に入らなければ職員やものに当たり散らす一方で、仲間の病室を飾るための花を育て続けた心優しい人物でもあった。だが、視力を失ったことで花を愛することができなくなった松原は、かねて予告していたように園内で自死した。小川は、こうした松原の人となりとその心情や交流を丹念に描き、「強い者に対へば何処までも強く、園内では、常に、何事でも弱い者の味方であった」松原のことを、患者で悪く言う者はないと記した上で、「神経痛の劇しい日の松原にして見れば、職員は所詮強い者の側の人間共でしかなかったのだ」と振り返る。そして、「自ら病みて寝ておもふ故里の日々に、松原の心持を思ひやうて見れば、何よりもかよりも、自分におほどかな母心の足りなかったことがおもはれるのだ」と述べた。

こうした叙述は、従来の姿を繰り返した面もないわけではない。だ

が、ここで叙述の中心に据えられたのは、長島事件で最も乱暴を働いた患者の末期に涙を流したという小川や光田ではなく、療養所において自ら命を絶たざるを得なかった一人の患者であった。『小島の春』の著者は、映画の封切りに先立ち、愛生園がすべての患者に生きる希望を与えるものとなっていないことを明かしていたのである。

その愛生園での『小島の春』上映会は公開三ヶ月を経た十月一日、興亜奉公日の式典後に開催された。鑑賞を希望する者が多数に及んだため、二回連続で上映が行われたという。その感想は『愛生』翌年三月号に掲載された。ここには「小山先生（小川正子の役名、引用者注）のあのやわらかな、影の深い明朗な顔と性格、小川先生にそっくりだった⁽³⁸⁾」という好意的な反応も見られる一方で、映像を小川との思ひ出や自らの過去と重ね合わせながら固唾をのんで見守った入所者の感想のなかには、作品への根本的な反省を迫るものも含まれていた。

映画が果てて帰途、私の友人は沈鬱な表情で「再びあれを観るに耐えない」と言った。これは全病者の本音を吐露したものであると思う。とされる。（中略）ここで考えるべきことは、この映画に対する一般世人の涙と病者の涙とは同じではないということである。病者のは終始画中の同病者の運命に託して自らの過去に注がれた血の涙である。世人の涙は癪者を憐れむ以上に、むしろ女医の崇高なヒューマニズムに感動せられての涙と解するのは辟見であろうか。（中略）原作者は決して自らのヒューマニズム強調のためにあ

の書を出されたのではない。あくまで癪者救済の熱意に燃えて書かれたものである。然るに本映画では癪者は救はれていない。原作者の真意を尊重するならば、愛生園のロケーションによって得られた多くの場面により、私達の更生した生活感情が表現されるはずである。それを私たちは切に期待していた。(柴たもつ)⁽³⁹⁾

世にも恐しい癪の悲劇をあまりにも強調しすぎたために、一般社会の人たちに癪の凄惨な感じばかりを与えはしなかったろうか。この映画をみたわれわれの肉親はどんな感じを受けただろうか。また癪を宣告されて療養所に入所するのを迷いつつ世の隅に悩んでいる幾多の病友、その肉親たちは、どんな感じを抱くだろうか。それらの人達には、癪に対するおそろしさばかりを一そう切実に感じさせられただけではあるまいか。(齋藤ふさを)⁽⁴⁰⁾

柴は、長島の上映会で「映画の進行と共に病者の充滿した礼拝堂は静まり返った。婦人席では啜泣のけはいがしげくなった」ことを書き留める一方、都会に暮らす妹が映画に感激し「周囲の観客もみな眼を拭っていた」と知らせてきたことに違和感を覚えていた。柴は映画が女医の「ヒューマニズム」を強調しすぎるあまり、小川の「癪者救済」という出版の狙いが歪められことに愕然としたのであり、「映画で癪者は救われていない」との思いを禁じえなかった。そして、それはなにも柴に限ったことではなく「全病者の本音」でもあるという。

齋藤もまた、映画が病いに「凄惨」な印象を与えるものであって、患者や親族に対してハンセン病の恐怖を助長しかねないと強く危惧していたのである。映画の主人公は患者ではなく、女医であったことを二人は指摘している。

これらは三十八名から寄せられた原稿のなかから、職員三名が選んで『愛生』に掲載したものであり、選者をして「みんな自由にものを言っているのが返って急所を突いてゐる」⁽⁴¹⁾と言わしめていた。しばしば『愛生』に近作の歌を寄せていた小川もまた、これらの感想を当然目にしたはずである。柴や齋藤の批判は、「続『小島の春』」で松原のことを描いた小川の気持ちを端的に代弁するものであって、むしろ小川を喜ばせたことであろう。とはいえ、それは、映画に「癪宣伝の効果」を認め、長島の人々に「一日もはやくみせてもらひ度い」などと光田へのリップサービスを繰り返す小川の急所を突くものでもあった。すなわち、映画は、小川がともにありたいと願った患者と、光田への建前を使い分ける彼女との間に、深刻な亀裂が生じていることを原作者に告げることとなったのである。

(4) 小 括

以上のように、小川は療養に専念するため愛生園を離れたものの、著書への反響が作り出した自らのイメージとのギャップに苦しめられていた。患者の手による文学作品の濫造を警戒しつつも、明石海人などの優れた作品が指し示す「正しい意味」でのハンセン病問題の立ち上がりに期待も示していた。その内容について、小川自身の説明は十

分なものではないが、患者の叫びをいかに受けとめるかが課題となっていたと見てよからう。にもかかわらず、自らの作品が映画化されると、小川の「ヒューマニズム」への礼讃が繰り返されることとなり、患者自身からもハンセン病問題のあり方について深刻な批判が提示されるようになった。

病気の回復が展望できないなかで、小川は、社会が自らに与えたイメージや作品に群がる社会事業家や官僚にもたれ掛かりながら進められていたハンセン病事業に疑問を持ちつつも、女性誌に対してであれ、光田に対してであれ、期待される役割をなお脱ぎ捨てることもできないという隘路で精神的にも追い詰められていた。そうした状況を打開していくためにも、健康を取り戻して愛生園へと戻り、再び患者との関係を回復することが、小川にとっての希望となっていたのである。

3 小川正子の死

(1) 遠のく長島

一九三八年秋の休職開始から、『小島の春』の映画化を挟み、休職期間三年の満了が迫ろうとしていた。この間、光田は一貫して小川の復帰を願い、小川自身もそれを望みながらも、病状は一進一退を繰り返し、小川は長野県蓼科高原などでの高地療養にも取り組んでいた。

一九四一年一月からは東京・世田谷の駒沢病院に転院している。この病院の院長は『療養夜話』⁽⁴²⁾などの著作で結核療養指導の専門家として知られた村尾圭介である。ただし、転院にあたっては、身許を隠す

ため長崎次郎が発案した「桑戸喜美子」という仮名を用いることとし、本名を知るのは病院内では院長の村尾のみであったという⁽⁴³⁾。これ以降差し出された、光田あての二通の書簡の封筒にも差出人として桑戸喜美子の名が認められるようになり、ついに小川は、奇しくもハンセン病患者のように、本名を隠しつつ東京での療養生活を送ることになったのである。

その前年の一九四〇年秋頃、小川は愛生園への帰園を真剣に探ろうとしていた。園を離れて療養に専念しようとしても落ち着いた療養環境が整うことはなく、復職のための回復が見通せない以上、まずは精神の安寧のためにも愛生園に戻ることに賭けたかったのであろう。だが、帰園の条件とされた小川のための付添要員の確保に見通しがたないことを同僚の医師である田尻敢に告げたところ、田尻からは計画そのものに難色を示された。小川はこのことに深く落胆し、帰園そのものを断念したいと一九四一年三月十八日付の書簡で光田に申し出た⁽⁴⁴⁾のだった。

結局附添ひをつれて来ひといはれるのも甲州からといふ条件がつくのも、結局は私が一人前の体でないのに長島入りをしようとする無理に原因があるのだから、誰がわるいのでもないのだからとあきらめが出来ました、その頃厚生省から結核の患者の職員の勤務停止の法律案が議会に出されるといふ新聞記事が出ました、十月の十九日辺りかとおもひます。これに従ふのが一番正しいの

だと思ひました。

一九四〇年二月には未成年者の体位向上と結核防止を目的とした体力検査の実施を義務づけた国民体力法が公布されるなど、結核対策もまた強化されつつあった。こうした動向のなかで、小川自身は愛生園への復帰を諦めようとしていた。また、このころ小川の理解者であった姉が亡くなったことで、小川は実家に居続けることも難しくなり、あえて東京へと転院したのであった。これらのストレスにさらされるなかで病状は再び悪化し、「残る方法は肋骨切除より方法がなく、それにも私が大した信頼と希望をもつてゐるわけでもありません」と悲観的な見通しを述べている。

それにもかかわらず、光田は小川に対して愛生園への帰園を求め続けていた。小川もまた作品を発表することが自らの本分ではないことを弁えており、「〔光田〕先生も仰言つた様に、私には小説はかけません、思想ありません、ただこの眼でみ、この心で感じた時のこと（報告）しかかけず、いま島をはなれて「おもひ出の記」をかいてみて、それはすぐに行きづまって自分のためにも病者のためにも役に立ちません、かへって「小島の春」を汚がすことしか出来ない様です」として、これ以上の作品の発表は『小島の春』をおとしめることになると思ふようになるにいたつた。だが一方で、小川が希望する臨床医としての活動は既に自らの健康状態が許さず、ついに小川は進退窮まつたのである。そして、苦しみの果てに小川が気づいたことは、社会が

与え自らが拒み続けたはずの『小島の春』の作者像に、自らが拘束されてしまつていたということであつた。

私がなほ長島にかへろうとして去年の秋あんなに困つたり苦しんだりしたこと、それから長く去就に迷ひ切つたことは何が原因なのか、矢張り小島の春の虚名に私がうかされてゐた結果なのだろうとおもひ、いまもなほなげく心も亦「小島の春」につけての私の虚栄心なのだろうと、そうしか考へられません。

小川が患者のために尽くしたいという初心は、医師として患者に寄り添ふことであり、また自らの声と筆でハンセン病問題を社会に訴えるという二つからなつていた。小川は自らの経験のなかからしか言葉を選べないのであつて、いずれの手段も患者とともにあることが前提となる。だが、健康を回復しないまま長島に戻つたとしても、本来の立場である医師としての職務を果たせないばかりか、かへつて同僚や患者に負担を与えるばかりである。それでも小川が島に帰ることができれば、入所者との再会が新しい言葉を生む可能性もあつたかもしれない。だが、すでに小川の作品やそれがもたらす反響はともにあるべき患者からも深刻な批判にさらされていた。それでもあえて愛生園へ戻ることが許されうるのは、自らの作品がハンセン病問題を世に知らしめた特別な功績によるものにほかならず、それは自らが拒否したはずの「虚名」へのもたれかかりにほかならなかつたのである。

だが、小川は、愛生園そのものの変質もまた、帰還を断念させる原因であることを光田に打ち明けていた。

私は愛生園が役所であることがおかしいのです、そこで職員としてあるべきである義務と責任とに於てとても果たすことの出来ない病弱の身が頼りなくおもひます、菌を散らさない様にして、迷惑をかけない様にしてと何度考へても、やはり皆が困るであらうといふこと、癩よりもっと伝染の危険のある自分の体をどうしませうか

もはや小川にとって、愛生園は明石らと歌を読みあうことのできたようなかつての共同体ではなく、隔離政策遂行のための「役所」なのであった。そこで働く者は皆、隔離政策の遂行に義務と責任を有すべき戦士として、小川が甘美な思い出に耽ることを許そうとはしなかった。この手紙の前の年、正月の献立をみた小川は「たべるといふことが最後のなぐさめである患者さん達がこれからどんなに不自由に耐へて行けるであろうかとおもはれてなりません。療養所の経営がどんなに困難になること⁽⁴⁵⁾でせう」と光田に伝え、泥沼化する総力戦が入所者**に強いるであろう「不自由」**に不安を覚えないうけにはいかなかったのである。そして、隔離を強め、患者に不自由を強いていく動向の真ん中に自分の作品が置かれているのである。

一か八かやってみないかといって下さる先生をおもひ、また、自分の仕事はもう終わったのだとも考へずには居られませんでした

こうして、光田が『小島の春』の作者を必要とするほどに、小川はもはや愛生園に自らの居場所がないことを悟り、長島への復帰を諦めるのだった。自らが願ってやまなかった『小島の春』の虚名を捨て去ることは、入所者と光田の待つ長島を去るという決意に達着したのである。

(2) 愛生園の退職

その約一ヶ月後の四月九日付の書簡が光田のもとに残された小川の最後のものとなった。⁽⁴⁶⁾ 東京を去る直前に書かれたこの手紙は、豊田四郎監督が見舞いに訪れ、今更ながら「癩がうつるものとしてあつかってゐるが、うつらぬものとしてしてらっしゃるのですか」と尋ねられ、「閉口した」という。一方で、長島に結核病棟担当医として復職してみたいという小川の淡い希望を聞いた豊田は「まだおやりになるおつもりですか」と呆れたともいう。小川も自らの去就に迷いがないわけではないが、次のような言葉は光田との別れを強く印象づけるものである。

癩のために私は有名になりましたが、実際癩の為に小島の春及び私が御用に立ったかどうかほんとのことはわかるものではありません。癩が有名になったこと、癩の解決の役に立ったかど

うかは、別の問題です。

それなのに、万万一、かりに癪のためになったからとて、それだからとて、自分の今後を、癪事業に背負って貰うはねばならぬこともありませんし、そうすべきでもないとおもひます。

小川は、『小島の春』がハンセン病への関心を高めこそすれ、ハンセン病問題の解決には役立っていないことをはつきりと自覚していた。だからこそ、残り少ない時間をハンセン病政策にもたれ掛かりながら生きていくことを拒んだのである。ただし、それはハンセン病患者との決別ではなかった。「とにかく癪に依って私はすくはれてゐるのです。御恩がへしをどうするか」という気持ちから、結核専門病棟が設置されればといったアイデアが頭から離れなかった。こうした自らの矛盾した立場はよく自覚されており、光田へも「医官退陣の弁、矛盾の巻を終わります」と筆を置いたのである。

光田への最後の手紙のあとの小川の心境は、名和千嘉が収集したいくつかの短歌にも記される。

【一】一九四一年十一月二十六日 光田先生より電報
かへり来よと電報をわれにたまはりし師の寂しさに思ひいたるも

【二】一九四二年三月二十三日 風寒し 晴
神山の癪院に行きて働かむかと思ひつづけつつ庭に雑草ぬく

【三】一九四二年五月二十八日 久しぶりに血が出た だまって天

井をむいて 血を啗いてゐるやすらけさよ

血を啗けどかたはらに居てうろたへる人もなき身のやすけさに居つ
【四】一九四二年十二月十二日
まごころとは何のいひぞや一すちに身はつらぬきて生命のきびしさ

【五】一九四二年十二月三十日 朝

あやまちをした者でなければ そしてそのあやまちを散々心の中で磨いてゐる者でなければ 世の限りをてらす佛の光を知ることはい出来ないであろう

人間の弱さかなしさ反省しるなくて得々と神言ふ人を憎む

どうぞこの痛苦のひまにさし入れる光をこそは神と言ふべき

世もあらず我が欺くときし「我がめぐみ汝なれに足れり」と神言ひたまふ

つひつひにかへる日のなき長島になほも曳かれてあるころかな
夕富士の山頂きの紅の雲ふきたてて風立つらしも

【一】は、退職の挨拶をした後も、引き続き光田からの来信があることを示す。だが、光田の寂しさを慮りながらも、自らが愛生園に戻ることではないことが再度確認されていた。とはいえ、患者との接点を持ちたいという気持ちは捨てたわけではない。そこで、【二】のように私立の神山復生病院（静岡県）ならば、国立療養所と異なり、患者との望ましい関係が持続されているかもしれないの思いが頭をもたげたことも、このときだけではなからう。

だが、実際には【三】のように、小川の病状はいよいよ重篤なものとなりつつあった。その傍らに咯血をうろたえる者もなく、迫り来る死期を自覚しながら、小川が孤独な闘病を続けていることが示唆される。それは小川に深い内省を迫るものとなった。【四】では、患者に尽くしたという意味で筋を通したはずの自らの歩みを振り返ろうとする。小川は「まごころ」の果てに死にいたる病いを得たことを怨むでもなく、厳粛な運命として受け入れようとしていたのであった。そして【五】は、名和が記録した最後の歌である。一連の歌の前書きは小川が自らの「あやまち」に苦しみ、もがき続けたことを伝えている。ここでいう「神」や「仏」とは、苦しむ小川の心を捕らえた信仰上の神であろうか。いずれにおいても、人間の弱さやかなしさへの洞察を欠きながら、神が騙られることを小川は拒絶する。そして、苦しみに寄り添うかのように、差し込んだ一筋の光に小川は心の平安や神秘を感じていたのであろう。郷里から夕暮れの富士山を見ながらも、やはり自らが全てを献げた長島への未練は断ちがたかったのである。それが、『小島の春』の作者にとつての、白鳥の歌となった。一九四三年四月二十九日、小川正子は四一才で他界した。

むすびにかえて

以上のように、家族と引き離された療養所のハンセン病患者と、患者のもとを離れて療養を余儀なくされる小川正子とは、それぞれ自らの名を奪われたということも含めて奇妙な一致を見せることとなっ

た。もともと、家庭内感染を防ぎながら患者を治療し、やがて看取るという小川の初心と、疾病を根絶するという国家のための隔離は小川にとつてある時期まで折り合いがついていたことも事実である。目の前で多くの患者を救うことができる臨床医としての喜びと誇りと責任感は、『小島の春』として世に届けられ、反響を呼ぶ。だが、小川の勤める愛生園においてさえ、入所者は自治を求めて職員と衝突していた。その根底にあった人間としての存在を問うような新しい文学的創造に小川も可能性を感じていた。小川は、患者との深い精神的なつながりを尊重することを起点としたものの、自治を含む療養所の制度を具体的に構想するものではなく、その行き着く先を小川は施設管理者である光田に対して言語化することもなかった。そして、自らが病み衰え、さらには療養所の資源が不足するなかで、閉塞感を強めたのだった。

このように、隔離が強められ入所者が苦しみながら成長を続けるなかで、志願して奉職したはずのハンセン病療養所が本当に患者のための施設たりえているかを小川に突きつけるようになった。患者のもとを離れて療養を続ける小川にとって、事業の意義を忘れ責任回避に腐心する中央官僚の消極的な姿勢や、隔離の徹底に向けて急速に巨大化する療養所の存在は、自らに復職をためらわせるばかりでなく、同僚や入所者双方に過度な負担を押しつけるものとなっていたからである。そして、そうした事態に拍車をかけているものの一つは、自らの作品にほかならなかったのであった。

そうした深刻な矛盾に気づいたとき、『小島の春』の著者としての小川の歴史的な役割は終わり、女医は愛生園での医師としての職を解かれた。ただし、それは師である光田との決別というよりは、矛盾に解決を見いだせないまま、島への復帰とそこでの新しい可能性を探ろうという苦しみなかで、小川の生命が時間切れを迎えたというほうがより相応しい。だが、小川の愛生園からの離脱は、患者を救うという初志がもはや果たし得ない、ハンセン病療養所や隔離政策の変質を象徴するものにほかならなかったのである。

【註】

- (1) 小川正子『小島の春』長崎書店、一九三八年、九七頁。小川は作品のなかで患者のことを「病友」という。
- (2) 「十坪住宅寄附金関係書」一九三九年、長島愛生園蔵、岡山県ハンセン病問題関連史料調査委員会編『長島は語る』前編、岡山県、二〇〇七年、三九八頁。
- (3) 藤野豊『「いのち」の近代史』かもがわ出版、二〇〇一年、特に第三章第四章。荒井英子『ハンセン病とキリスト教』岩波書店、一九九六年。成田龍一『《歴史》はいかに語られるか』NHK出版、二〇〇一年。
- (4) 末利光『ハンセン病報道は真実を伝え得たか』JML、二〇〇四年。
- (5) 荒井裕樹「「病友」なる支配—小川正子『小島の春』試論」『昭和文学研究』五五号、二〇〇七年、のち『隔離の文学』書肆アルス、二〇一一年に所収。秦重雄『挑発ある文学史』かもがわ出版、二〇一一年。
- (6) 以下、小川の経歴は清水威『小川正子と『小島の春』』（長崎出版、一九八六年）などによる。
- (7) この石原は、のちに小川の結核の診察を行い、その最期を看取ることになる。

- (8) 田中逸野については、米田勇『中田重治伝』（大空社、一九九六年）などを参照のこと。
- (9) 林富美子『野に咲くペロニカ』小峰書店、一九八一年、二六頁。
- (10) 名和千嘉『小川正子と愛生園』私家版、一九八八年、一一〇頁、内田フミエの回想。
- (11) 小川正子「石打たれる人々」『新女苑』一九三九年一月号。
- (12) 小川正子「石打たれる人々」『新女苑』一九三九年一月号。
- (13) 原田禹雄『麻痺した顔』ルガール社、一九七九年。
- (14) 神谷美恵子「光田健輔の横顔」『人間をみつめて』みずす書房、一九九〇年。初出は朝日新聞社、一九七一年。なお、太田正雄については、拙稿「太田正雄（木下奎太郎）のハンセン病研究について」（『歴史評論』二〇〇四年十二月号）を参照のこと。
- (15) 外来診療を続けていた大阪帝国大学医学部附属病院の医師もまた光田らから批判されるようになっていた。廣川和花『近代日本のハンセン病問題と地域社会』大阪大学出版会、二〇一一年、第四章を参照のこと。
- (16) 小川正子『小島の春』長崎出版、一九三八年、二八二頁。
- (17) 清水威『小川正子と小島の春』長崎出版、一九八六年、一七九頁。
- (18) 以下の引用は、光田健輔宛小川正子書簡（一九三八年十二月頃）、岡山市立中央図書館蔵光田健輔文庫。
- (19) 小川正子「石打たれる人々」『新女苑』一九三九年一月号。
- (20) 岡山市立中央図書館蔵光田健輔文庫。
- (21) 以下の引用は一九四〇年三月九日付光田健輔宛小川正子書簡、岡山市立中央図書館蔵光田健輔文庫。
- (22) なお、杉村が小川正子を直接論評した文書は現時点で確認されていない。ただし、一九七〇年『コラムの眼』でナイチンゲールの言葉を引きながら、「白衣の天使と自分を考え、感傷的な自己満足に陥る人は、無益というよりさらに有害です」と述べたことは、杉村の小川に対する評価を示唆していると思われる。
- (23) 以下の引用は一九四〇年七月十日付光田健輔宛小川正子書簡、岡山市立

- 中央図書館蔵光田健輔文庫。
- (24) 一九四〇年七月十日付光田健輔宛小川正子書簡、岡山市立中央図書館蔵光田健輔文庫。
- (25) 馬場純二「医官、内田守の文芸活動」『歴史評論』二〇〇四年十二月号。猪飼隆明も馬場の評価をひきながら、内田の活動を高く評価する（猪飼隆明『近代日本におけるハンセン病政策の成立と病者たち』校倉書房、二〇一六年、第四章）。
- (26) 荒井裕樹『隔離の文学』書肆アルス、二〇一一年、第三章。
- (27) 北条民雄「独語―癩文学ということ」（未完）川端康成編『定本北条民雄全集』下、東京創元社、一九九六年、一五二頁。
- (28) 一九三九年九月三日付光田健輔宛小川正子書簡、岡山市立中央図書館蔵光田健輔文庫。なお、『萩の島里』の編者である内田守人とは内田守のことである。
- (29) 山下多恵子『海の蠍―明石海人と島比呂志、ハンセン病文学の系譜』未知谷、二〇〇三年、七二頁。
- (30) 長島愛生園神谷書庫蔵。
- (31) 光田健輔「小島の春の感想」『愛生』一九四一年三月号、三頁。
- (32) 藤井仁子「可視と不可視のポリティクス―映画『小島の春』と総力戦体制下における〈癩〉の表象」『UP』三一巻一一号―三二巻四号、二〇〇二―〇三年。
- (33) 石居人也「ハンセン病表象としての映画『小島の春』」黒川みどり編『近代日本の「他者」と向き合う』解放出版社、二〇一〇年。
- (34) 荒井英子「ハンセン病とキリスト教」岩波書店、一九九六年。
- (35) 一九四〇年七月二十七日付光田健輔宛小川正子書簡、岡山市立中央図書館蔵光田健輔文庫。
- (36) 坂入美智子『潮鳴が聞える―私の小川正子』不識書院、二〇〇二年、二五五頁。
- (37) 小川正子「続『小島の春』」『婦人公論』一九四〇年四月。
- (38) 『愛生』一九四一年三月号、一六頁、田島康子の記述。
- (39) 『愛生』一九四一年三月号、一二頁。
- (40) 『愛生』一九四一年三月号、七頁。
- (41) 『愛生』一九四一年三月号、一七頁。
- (42) 村尾『療養夜話』一九四〇年、長崎出版。
- (43) 一九四一年一月十七日付光田健輔宛桑戸喜美子（≡小川正子）書簡、岡山市立中央図書館蔵光田健輔文庫。
- (44) 一九四一年三月十八日付光田健輔宛桑戸喜美子（≡小川正子）書簡、岡山市立中央図書館蔵光田健輔文庫。
- (45) 一九四〇年一月五日付光田健輔宛小川正子書簡、岡山市立中央図書館蔵光田健輔文庫。
- (46) 以下の引用は、一九四一年四月九日付光田健輔宛桑戸喜美子（≡小川正子）書簡、岡山市立中央図書館蔵光田健輔文庫。ただし、後述するように、光田はその後もたびたび小川に書簡を送っており、小川の書簡もまた別の所蔵先から確認される可能性がある。

（尼崎市立地域研究史料館）